

# 第三章 霊性の発信



## 立教大学からの発信

立教大学という場を借りて、同時に大学教授というポジションを借りて、これまで色々なメッセージを社会に発信してきました。良し悪しは別として、日本社会にあって大学という場はやはりある種権威の場であって、同じ内容でもそこでの発言には重みと信頼性が付与されるような気がします。逆に言えば、それだけ発言の責任が問われるということです。私自身が霊性の重要性に目覚めてからは、直接、あるいは間接的に霊性（スピリチュアリティ）に関わる講演やシンポジウムを多数開催してきました。そこでの発言や議論は霊性の本質を考える上でとても重要であり、貴重な記録です。ここでは、そのいくつかを紹介したいと思います。

## 教育とスピリチュアリティ

2009年に立教大学ウエルネス研究所の主催で、『教育とスピリチュアリティ』と題したシンポジウムを開催しました。シンポジストは、以下の5名でした。

飯田史彦先生。本書でも何度も言及していますが、「生きがい論」の提唱者で元福島大学教授。ご著書『生きがいの創造』シリーズは累計200万部を超える大ベストセラーです。

カール・ベッカー教授。京都大学こころの未来研究センター教授で、生命倫理やスピリチュアル・ケアなどを専門としています。日本におけるスピリチュアリティ研究の第一人者です。

上田亜樹子チャプレン。立教大学チャプレンで、キリスト教教育を実践しております。



立教大学 池袋キャンパス

大石和男教授。立教大学コミュニティ福祉学部教授で健康心理学を専門とし、飯田先生の「生きがい論」等を用いてスピリチュアリティ教育を実践しています。

これに、私濁川を含めた5名でした。なお、所属やポジションは当時のものです。

ここでは、5名の演者がそれぞれ「スピリチュアリティ」に関する短い提言を行い、その後「教育とスピリチュアリティ」というテーマで議論を深めました。

議論の内容をごく簡単にまとめると、以下ようになります。

日本において、教育からスピリチュアルな部分が欠落していることが多くの社会問題を引き起こしているが、教育界は宗教教育との混同を恐れ、スピリチュアリティの導入に躊躇してきた歴史がある。今後は、スピリチュアルな価値観を社会全体で醸成する必要がある。そのためのツールは色々考えられるが、自然を舞台にしての教育や飯田の『生きがい論』は有効に働く可能性がある。<sup>(10)</sup>

このように議論の内容を今振り返ってみると、ごく当然のことしか述べてないのですが、当時大学でこのような議論をするのは、それなりに勇気のいることでした。なおこのシ

ンポジウムでは、「スピリチュアリティ」という表現を使っていますが、これは、ほぼ「靈性」という言葉で置き換えて良いと思います。

このシンポジウムの目玉は、何といっても飯田史彦先生の存在でした。飯田先生は当時『生きがいの創造』シリーズが売れ、多くの場所でご講演をなさっていたのですが、非論争主義を貫き、この種の議論には参加しないというスタンスでした。ただここに至るまでの数年間、私は飯田先生との共同研究プロジェクトに参加しており、これ以外にも飯田先生とは個人的にも懇意にさせて頂いた経緯があり、何とか説得して、このシンポジウムに参加して頂けたのでした。その辺の事情をシンポジウムの席上で、先生は次のように語られています。

私は非論争主義ということまでできたので、人前で「生きがい論」について議論したことは一度もないのです。十数年間、誰とも議論をしませんでした。しかし今日は、私がお本分に尊敬できるメンバーがそろって下さったということでご参加したのですが、議論は最初で最後かと思っています。さて、このようなシンポジウムの場に出ましたので、ここに出て非論争主義とはいきません。本日は、珍しく自分の意見をはっきり申し上げたいと思っております。(10)

飯田先生は、人前で『生きがい論』について議論するのは、これが最初で最後だと言われました。その意味でも、このシンポジウムでの発言はとても貴重なものでした。

飯田先生がスピリチュアルなカウンセリングをすることの目的は単純明快で、目の前の困っている人を救うことです。純粹に、ただそれだけなのです。しかし面談方式のカウンセリングでは救える人数には限界があるので、名著『生きがいの創造』を書いた訳です。このシンポジウムの席上でも、次のように述べていました。

私はまさに、この種の概念論議で自分の時間を費やすぐらいであれば、一人でも目の前にいる人を救いたいというので大学教員を辞



シンポジウム「教育とスピリチュアリティ」（2009年）  
左から、大石和男氏、カール・ベッカー氏、  
飯田史彦氏、上田亜樹子氏

飯田先生は、人前で『生きがい論』について議論するのは、これが最初で最後だと言われ

めました。従って、この場にいること自体が浮きまくっているかと思っていました。このような議論の暇があったら、病院に行つて、スピリチュアルカウンセリングをしたいと思つているというのが本音です。(10)

このシンポジウムでの飯田先生のご発言で特に印象に残っているのは、如何にして悩める人を救うか、を議論している時の以下のくだりです。ここで先生は、敢えてご自身の失敗例を持ち出して、「方法は何でも良い。とにかく目の前の悩める人を救うことが大切なんだ」と強調されました。ご自身の提唱する『生きがい論』の有効性を主張するのではなく、時にご自身の『生きがいの創造』シリーズに否定的な立場を取るキリスト教の成功例を挙げ、「救えるなら何でもよい」と言うのです。ここに飯田先生の神髄をみることができます。少し長いですが、その時の発言をそのまま引用します。

私の目的ははっきりしていて、人を救えるかどうか、これのみななので、ここに区別を付けることに、あまり意味を感じていないのです。救えることさえできれば、どちらでも結構です。(中略) いかにか救うか、ということだけなのです。

ただ、それに関して、分かりやすい事例を一つ挙げますと、これまで長年にわたってたくさんのカウンセリングを行ってきましたが、「生きがい論」で説明しきれず、私自身が行き詰まってしまった事例が一つだけあるのです。正直に公開します。

それは、「生きがい論」の前提は、「すべての現象には意味があつて、学びである」という前提なのです。けれども、あるお母さんから「私の子供が深刻な知的障害を持って生まれてきて、育っている。飯田先生の本を読むと、それも意味があつて、本人にとつても学びだし、それによって私たち家族も色々なことを学ばなければならない。そこまでは良かったのです」とおっしゃったのです。

次に何が出てきたのかというと、二人目の子どもも、同じ障害を持って生まれてきた。今、同じ障害を持つ子どもを二人育てていて大変な日々を送っている。「なぜ二人も必要だったのですか。学びであれば一人で十分じゃないですか」と言われたときに、私は何千件も相談を受けてきましたが、初めて行き詰まってしまったのです。その後、その方と何度かやりとりしました。実は立教大学だからそこの話をしますが、その方はその後キリスト教に入信されて救われたのです。私にできなかったことを、キリスト教がやられたわけです。